統合失調症の女性患者に恋愛感情を向けられた精神科男性看護師の感情体験

清水隆裕*、入江拓
聖隷クリストファー大学

【目的】精神科に入院する患者からの看護師への好意は、しばしば経験する現象である。筆者が先行研究として、統合失調症の患者に好意をもたれた女性看護師の感情体験を分析したところ、女性看護師は暴力体験と同様に、自分自身に対する身体的な危機的と体験していた。しかし、男女の対人認知研究においては多くの性差が明らかにされており、女性看護師の感情体験を構造化しただけでは不十分である。そこで、本研究の目的は、精神科病棟に勤務する男性看護師が、統合失調症の女性患者から好意を向けられることによって、どのような感情体験をしているのか明らかにすることとした。
【研究方法】精神科経験年数 1 年以上で、A 県内の精神科男性看護師 5 名を対象とした。インタビューガイドを作成し、統合失調症の患者に好意を向けられたときの感情体験について 1 名につき 1 回約 60 分の半構成的インタビューを行った。インタビューは同意を得て IC レコーダーに録音した。インタビューは録音後、逐語録を作成しデータとした。逐語録を意味ある内容ごとに切片化しコード化した後、内容の類似性に沿ってサブカテゴリー、カテゴリーへと抽象化し、カテゴリー間の関連性を検討した。
【結果】統合失調症の患者から好意を向けられることによる精神科男性看護師の感情体験を分析した結果、197 のコードから、41 のサブカテゴリーを経て、12 のカテゴリーを抽出した。以下【】はカテゴリーとする。統合失調症の女性患者に好意を向けられた、男性看護師は【アプローチに対する驚き】を体験していた。男性看護師は好意を向けられると【好意をもたれることに関する嬉しい気持ち】を持つために、反対に魔がさすことや、セクシャルハラスメントに勘違いされること、スタッフなどの目を注意し【社会的な問題になることへの恐れ】を感じ、かつ【職業人としての使命感】を意識することで患者と一線を引く努力をしていた。そのため患者に対する立ち振る舞いが複雑になるために【面倒臭い気持ち】も同時に体験していた。男性看護師は、好意を向けられると嬉しさがあるため、【好意を向けられなくなると寂しい】気持ちを体験していた。しかし、抱きついてくるなどの【行動化されると恐怖を感じる】こともありその場合、【スタッフからの配慮がありがたい】と体験していた。男性看護師は基本的に好意感情は健康な面ととらえ【好かれることはいい看護に活用できる】ととらえていた。また報われない好意に対して【かわいそうだと思う】が、そのような病気に対する【偏見を受け入れている】とも体験していた。時には【自分の患者との向き合い方への自責感】に陥り、自ら対応を振り返ることもあった。
【考察】男性看護師は、看護学生時代から女性集団の中にあることで、男性性の危機的状況の中で生きている。そのような状況の中で、女性から看護現場において好意を向けられることは、自らの男性性の再獲得の喜びがあり、そのため男性看護師は好意に対して喜びがまず前景に来るのであると考えられた。男性看護師は、女性看護師のように身体的な危機が迫っていると体験はしていなかったが、その喜びのため社会的な危機が迫っていると体験していた。以上のことから、チームメンバーは男性看護師が喜びと社会的な危機との葛藤を体験しながら患者と向き合っていることを確認しておく必要がある。また男性看護師は、好意をもたれることが喜びとは限らないといった、女性看護師との感情体験の差異を意識する必要性があることが考えられた。

＊2014 年 11 月第 3 回日本精神科医学会学術集会にて発表予定。